

Contents *****

特集：「スリーパー・ジョー」の天下取り戦略	1p
<先週の”The Economist”誌から>	
”Retro or radical?” 「バイデンはレトロか、ラジカルか？」	7p
<From the Editor> 米大統領選挙の最新情勢	8p

特集：「スリーパー・ジョー」の天下取り戦略

米大統領選挙は「トランプ劣勢」が伝えられていますが、その割に民主党候補のジョー・バイデン氏について語られることが少ないようです。何しろ40年以上をワシントンDCで過ごしてきた超ベテラン政治家で、一通りのことは知れ渡っている。それ以上に「面白い人ではない」ので、今更取り上げて…という感じがあるのでしょう。

ただしバイデン氏の様子を見てみると、敢えて目立たないように努めている感もある。その間に、①副大統領選び、②選挙資金集め、③政策調整などの地味な仕事に汗をかいている。やはり端倪すべからざる人なのではないでしょうか。第46代大統領への就任が現実味を帯び始めたバイデン氏はどんな人物なのか、この辺で整理しておきたいと思います。

● あだ名も不発の「居眠り男」

トランプ大統領はライバルにあだ名をつける名人である。ヒラリー・クリントン氏は”Crooked Hillary”（ひねくれヒラリー）、バーニー・サンダース氏は”Crazy Bernie”（イカれたバーニー）、マイケル・ブルームバーグ氏は”Mini-Mike”（ちっこいマイク）にされてしまう。天敵・ニューヨークタイムズ紙は、”Failing NY Times”（落ち目のNYT紙）となる。しかし敵もさるもの、トランプ批判を武器に部数を伸ばしているらしい。

今回の大統領選挙の挑戦者、ジョー・バイデン元副大統領のことは”Sleepy Joe”（居眠りジョー）と命名した。御年77歳。上院議員を36年も続け、その後でオバマ政権の副大統領を2期8年。良くも悪くも政界の大ベテランである。

1990年代のCNN映像などを見ていると、外交委員会や司法委員会で活躍したバイデン上院議員はかなり早口だった。それが今では、ゆっくり話すようになっている。”Sleep Joe”とはうまく言ったもので、要は「ヤツはもうボケた」と皆に思わせたいのであろう。何しろ77歳と言えば、アメリカ人の平均寿命に近い。

現在、ほとんどの世論調査で現職トランプ大統領に対して優勢とみられているバイデン候補は、選挙戦術はきわめて地味である。Covid-19 が猛威を振るった時期は、3カ月間もデラウェア州の自宅にこもって地下室から動画メッセージを送る日々が続いた。5月末のメモリアルデーから人前に姿を現すようになったが、大規模な集会は避け、出かける際にはかならずマスクをしている。どこへ行ってもド派手なトランプ大統領とは好対照である。

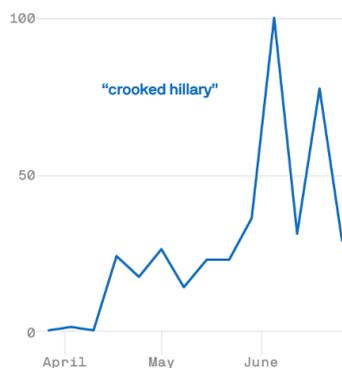
もっともバイデン氏は演説が上手くないうえに、麻生太郎氏並みの失言王なので、下手に出しゃばって相手に攻撃材料を与えるより、このまま目立たないままでいる方がいい、と割り切っているようでもある。

実際にグーグル調査によれば、4年前の”Crooked Hillary”に比べて今年の”Sleepy Joe”の検索件数は圧倒的に少ない¹。ヒラリー攻撃はうまく”buzz”ってくれたけれども、バイデン攻撃は不発のようである。キャラが立ってない相手だけに、反応が乏しいのである。

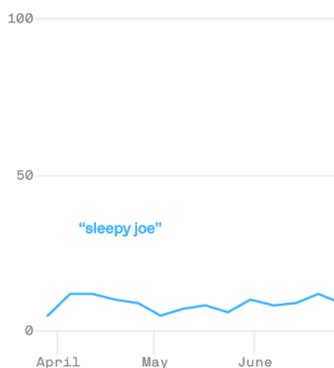
Google search trends for “Crooked Hillary” and “Sleepy Joe” in the U.S.

Google Trends index where 100 = most searches

March 27 to June 26, 2016



March 29 to June 28, 2020



そもそも 2020 年選挙は、現職に新人が挑む戦いだ。こういうときは現職に対する信任投票になる。そして今の米国はまさしく「コロナ敗戦」。死者数は既に 13 万人を超えて、年末には 20~30 万人に達する勢い。失業率はやや改善したとはいえ 2 ケタ台である (11.1%、6 月)。そしてジョージ・フロイド氏の死亡に伴う”Black Lives Matter” (黒人のイノチをなめんなよ!) 運動は、全米に広がっている。

これらの問題は、すべて大統領の責任に帰せられる。大統領に不信任が突きつけられれば、自然と自分にお鉢が回ってくる。だったら、現職が自滅していくのをじっと待っていればいい。そこまで達観しているとしたら、「居眠りジョー」はなかなかの策士と言えよう。

先週の”The Economist”誌カバーストーリーによれば (本号の P7 に抄訳を掲載)、現状ではバイデン氏が必勝であるどころか、民主党が上院での多数も獲得して、「ホワイトハウスと上下両院の支配」を得ることまで望める状況だという。いわゆる Trifecta (3 連単) が成立すると、米国政治は何でも即決できるようになるからこれは一大事である。

¹ <https://www.axios.com/trump-biden-sleepy-joe-culture-wars-499e1334-4609-4fb6-ad6c-fd33c0054b55.html>

● 名人は 11 月 3 日の先を読む

そこで"Sleepy Joe"をどう「意識」すべきか考えていて、「昼行燈のジョー」がピッタリではないかと思いついた。いつもぼんやりしているように見えた大石内蔵助が、最後は立派に四十七士をまとめて討ち入りを果たした、というイメージである。

実はバイデン候補、目立たないところで仕事をしている。まずは選挙資金集めで、6月末時点で合計 3.16 億ドルも集めている。トランプ陣営が 3.53 億ドルなので、ほとんど追いついたも同然である。ちなみに今年 4 月時点では資金は 1 億ドル未満で、トランプ陣営のはるかに後塵を拝していた。人気のバロメーターとなる小口献金の比率も、4 割台に達しているのは立派なものである。おそらくオバマ前大統領の助けを得ているのだろう。いかにも抜け目のない動きと言えるのではないだろうか。

候補者の懐具合を見てみよう

• Joe Biden (D)				• Donald Trump (R)			
	Campaign Committee	Outside Groups	Combined		Campaign Committee	Outside Groups	Combined
Total Raised	\$211,153,197	\$105,091,075	\$316,244,272	Total Raised	\$287,605,219	\$65,633,178	\$353,238,397
Total Spent	\$128,726,996	\$75,258,374	\$204,085,370	Total Spent	\$197,010,294	\$41,209,413	\$238,219,707
Cash on Hand	\$82,428,453	\$29,732,701	\$112,161,154	Cash on Hand	\$109,123,213	\$24,423,765	\$132,546,975
Debts	\$0	-	-	Debts	\$240,512	-	-
Date of Report	May 31, 2020	June 26, 2020		Date of Report	May 31, 2020	June 26, 2020	

Large Contributions	59.66%	Small Individual Contributions (<\$200)	57.05%
Small Individual Contributions (<\$200)	40.30%	Large Contributions	42.43%
Other	0.03%	Other	0.51%
Candidate self-financing	0.00%	Candidate self-financing	0.00%
Federal Funds	0.00%	Federal Funds	0.00%

<https://www.opensecrets.org/2020-presidential-race>

既にバイデン氏は、「政権移行チーム」(Transition Team)を立ち上げている。大統領選挙の投開票日から、翌年 1 月 20 日正午の大統領就任式に向けて、政権交代を首尾よく行うためのチームである。

11 月 3 日にバイデン氏が首尾よく大統領に当選できたとして、問題はそれから先である。郵便投票が多くなる今年、投票日から 1 週間くらいは集計が間に合わない恐れがある。その間にトランプ大統領が「投票に疑義がある」などごね出して、敗北を認めないことは十分に考えられる。Covid-19 はその時期にも収束していない公算が大であるし、経済も危機的な状態が続いているかもしれない。まさしく大混乱の中での政権交代劇となるだろう。

ちょうど 2008 年、リーマンショック後の国際金融危機のさなかに、ブッシュ (子) 政権からオバマ政権への交代が行われたことがある。バイデン氏は当時、副大統領候補であったから、おそらく当時のことをよく覚えているのであろう。

そこでチームのヘッドには、テッド・カウフマン氏を任命した。かつての上院議員時代に、長年にわたって首席補佐官を務めた「腹心中の腹心」である。次期バイデン政権の人事や政策構想は、このチームで練られるはずである。そのことは民主党員の間では自明のことなので、「なるほど、ボスは数手先を読んでいる」ことが伝わっているはずである。

● 党内調整で大胆に政策を取捨選択

「昼行燈」にはもうひとつ重要な仕事がある。それは党内融和、はっきり言ってしまうと党内左派の取り込みである。

バイデン氏は民主党内ではずっと弱い候補者であった。コロナ禍がなかったら、サンダース上院議員の勢いを止められなかっただろう。そこで「バイデン＝サンダース統合タスクフォース」を立ち上げ、7月8日にはその政策提言を公表した²。8月に行われる党大会では民主党政策綱領が発表されるが、これがその叩き台となるはずである。

ここに挙げられた 6つの政策の柱の文言と序列を見ていると、「民主党政権の優先順位」が浮かび上がってくる。上院の多数も含めた「民主党の3連単」が成立すると、2021年以降の米国はこの方向に向けて一気に走り出すかもしれない。

- (1) Combating The Climate Crisis And Pursuing Environmental Justice (気候変動)
- (2) Protecting Communities By Reforming Our Criminal Justice System (刑事司法改革)
- (3) Building A Stronger, Fairer Economy (経済)
- (4) Providing World-Class Education In Every Zip Code (教育)
- (5) Achieving Universal, Affordable, Quality Health Care (医療)
- (6) Creating 21st Century Immigration System (移民制度)

冒頭に来るのは、気候変動問題である。しかも「環境正義の追求」という強い言い方をしている。おそらく中道穏健派のバイデン氏としては、「この分野だったら左派に譲歩しても構わない」と思っているのであろう。もっとも左派としては、ここに”Green New Deal”という言葉を入れたかったかもしれない。この問題に関心が強いミレニアル世代を掌握するためにも、この問題を政権の「一丁目一番地」にする狙いであろう。

2番目に来るのが「刑事司法改革」である。今回のバイデン氏の選挙は徹頭徹尾、黒人票が追い風になっている。今年2月29日のサウスカロライナ州予備選挙で勝てなかったら、候補者としてはゲームエンドになっていた。たまたま地元の黒人議員、ジム・クライバーン下院議員のエンドースメントを受けて、そこで九死に一生を得ている。

そして今は BLM運動の追い風を受けている。「副大統領として8年間、オバマ大統領を支えた」ことが最大の政治的資産となっている。2016年に低かった黒人有権者の投票率がほんのわずかでも上昇するだけで、民主党政権の誕生確率は大きく上昇するはずだ。

² <https://joebiden.com/wp-content/uploads/2020/07/UNITY-TASK-FORCE-RECOMMENDATIONS.pdf>

もっとも上院議員時代のバイデン氏は、クリントン大統領が「犯罪に厳しい民主党政権」路線を打ち出していた時期に、上院の司法委員長として協力的だったという前歴がある。そこを突っ込まれると、大いに困ることになりそうだ。

3 番目になって、やっと経済の出番となる。企業ではなく労働者を守るという観点から、「最低賃金の増額」「働く家族の保護」「雇用創造への投資」「持ち家政策の促進」といった文言が並んでいる。バイデン政権になった場合は、やはり増税と規制強化は避けられないと考えておくべきだろう。通商問題については、ごく軽く触れてある。この問題は下手につつくと、ブルーカラー層から「トランプ政権の方が良かった」と言われかねないところがあり、民主党としては悩ましいところである。

4 番目は教育問題である。"Every Zip code"（あらゆる郵便番号で）という言い方が興味深い。米国は極端な格差社会なので、住んでいる地域によって収入や職業、教育水準までくっきりと分かれてしまう。どうかすると、Covid-19 の感染比率までも違ってくる。せめて生まれ落ちた場所で教育が決まってしまうないように、という思いが込められている。

5 番目によりやく医療問題が出てくる。去年から何度も行われた民主党の大統領候補テレビ討論会では、サンダース氏やウォーレン氏の口から"Medicare for All"（国民皆保険制）という言葉が何度も出てきた。しかるに、Covid-19 でどれだけ医療費が増えるかわからない状況では、さすがにそれは現実的ではない。医療保険制度に対する有権者の期待値をどうコントロールするかは、次期政権にとって非常に気を使うところであろう。

6 番目は移民問題である。トランプ政権下で進んだ移民イジメを是正するぞ、ということである。ここは民主党が新たな支持層を拡大するためにも重要な項目となる。

こうしてみると、党内左派を着実に取り込みつつ、全体としては政策を無難な線にまとめようとしている。「昼行燈のジョー」は、ぼんやりしているようで必要な仕事を済ませている。およそ中道穏健派の政治というものは、支持者を熱狂させることは滅多にない。しかしそうでない政治に比べると、見ていて安心かつ安全なところがある。

● ジョーの人生は「サバイバー」そのもの

かくも「面白みに欠ける政治家」であるジョー・バイデン氏は、実は波乱万丈のファミリー・ヒストリーを背負った人物でもある。そのことは米国では有名な話なのだが、以下のような事の性質上、あまり語られることはない。

1942 年にペンシルベニア州スクラントンに生まれた。カトリックの家系で 4 人兄弟の長男である。父の事業の失敗から 10 歳でデラウェア州ウィルミントンに移住する。そこでデラウェア大学、シラキューズ大学ロースクールに学び、弁護士を開業する。

というと順風満帆な人生に聞こえるかもしれないが、学業成績はお世辞にも立派なものではなかった。ロースクールでは論文の盗作で処分を受けているが、これは今なら退学ものである。若い頃は吃音に苦しみ、鏡の前で詩の朗読を繰り返して克服した。喘息の持病により、ベトナム戦争は徴兵猶予になっている。

縁あって政治の世界に入り、1972 年の上院議員選挙に民主党から挑戦することになる。共和党現職の内紛があったこともあり、バイデン氏は弱冠 30 歳にして上院議員に当選する。ところがその直後の 12 月 18 日に不幸が訪れる。妻のネイリアが交通事故を起こし、娘のナオミとともに帰らぬ人となり、同乗していた幼い長男と次男は重傷を負ったのである。

衝撃を受けたバイデン氏は議員を辞職しようとするが、周囲に止められる。そして男手ひとつで息子 2 人を育てるために、ウィルミントンから片道 1 時間半の鉄道通勤でワシントン DC に通うようになる。1977 年に再婚。1 女をもうけている。

政治の世界では再選を重ね、順調に出世を遂げる。上院の外交および司法委員会を中心にキャリアを積み上げ、1988 年の大統領選挙予備選に名乗りを上げる。このときは、英労働党キノック党首の演説を盗用した疑惑が生じて撤退している。その直後、今度は脳動脈りゅう破裂による手術を受け、一時は生死をさまよった。しかし懸命のリハビリによって 7 カ月で退院。文字通り「サバイバー」の人生なのである。

家族愛が強い人ながら、家族運に恵まれない人でもある。長男ボー・バイデンは長じてデラウェア州で政治家としてのキャリアを積み、2006 年には州司法長官となる。2008 年に父が副大統領に指名を受けたとき、デラウェア州知事が後釜として上院議員に指名しようとした。しかし本人はイラクへ従軍することを選択し、この機会を辞退する³。その後も州司法長官を務めるが、2015 年には脳腫瘍にて逝去。享年 46 歳。父ジョー・バイデンが受けた衝撃は深く、2016 年選挙への出馬を見送ったのはそのためではないか、とされている。

次男のハンター・バイデンは弁護士資格を取り、ロビイストとなった。これが名高い「ウクライナ疑惑」の主である。薬物検査で海軍を除隊させられたこともあり、こう言うのは気の毒だが「賢兄愚弟」である。愛する長男に先立たれ、次男に足を引っ張られる哀れな父なのだが、それでも他人に次男を悪く言われると冷静ではいられなくなる。秋になれば大統領候補 TV 討論会が行われるが、このことはバイデン候補のアキレス腱となるだろう。

● 副大統領候補はどんな女性か？

間もなく明かされる「昼行燈」の大事な仕事に、副大統領候補の選定がある。「8 月 1 日頃には公表する」と言っているので、お目見えはそう遠くないだろう。女性候補を選ぶ、それも有色人種の候補者を、とされている。となると、ここでいろいろ下馬評を論じたいところだが、当てる自信がないので自粛することにした。

それというのも、この選択は非常に難しい。77 歳というご自身の年齢を考えれば、次期副大統領は「即戦力」でなければならない。なおかつ、トランプ氏のあくどい攻撃に耐えられ、バイデン氏に勝利をもたらすことができる人物でなければならない。

もうひとつ、バイデン氏には「女難」の相がある。セクハラ訴訟も受けているし、人種やジェンダーにまつわる失言も少なくない。逆に言えば、この選択を無難に済ますことができれば、大願成就にはかなり近づいたということになるだろう。

³ この時代わりに上院議員になったのが、今回、政権移行委員長になったテッド・カウフマン氏である。

<先週の”The Economist”誌から>

”Retro or radical?”

「バイデンはレトロか、ラジカルか？」

Cover story

July 10th, 2020

*トランプ大統領の当選に驚き、治世を嘆き、批判し続けた **The Economist** 誌はついに「出口」を見出したようです。ジョー・バイデン候補への評価に思わず力が入ります。

<抄訳>

いずれトランプ大統領の歴史が書かれるとき、6月初めのラファイエット広場での写真撮影が転換点とされるだろう。目立つことこそ彼の政治手法だが、聖書を小道具のように扱ってキリスト教徒を傷つけ、軍司令官を引き連れて恥をかかせた。しかも効果はサッパリだった。トランプ氏は焦っているように見え、パフォーマンスがすべてしまったのだ。

コロナ以前、トランプ氏は再選基調にあった。現職は強く、本誌の選挙モデルでは僅差でリードしていた。だが今は深みに嵌まっている。バイデン氏は世論調査で 9p 以上の差をつけ、フロリダ、ミシガン、ウィスコンシンなど激戦州でリードし、高齢者や白人の大卒未満層でも強い。再選確率は今や 10% で、彼は良い大統領ではないとウイルスが示したのだ。

ただし 11 月は当分先で、何があっても不思議はない。経済が復活すればトランプ氏のチャンスは増える。逆に感染が収まらず、各州の郵送投票が間に合わなければ混乱は必至だ。

バイデン氏は労せずして、地滑りの勝利に近いところにいる。上院における民主党多数まで手が届く。そうなれば生産性の高い政権となるだろう。コロナ以前、バイデン政権は復古調で、世界を 2016 年以前に戻すだけとみられていた。もっと先まで行けるかもしれない。

それが脅威だとトランプは言う。おいぼれが危険な急進派に乗っ取られ、警察解体や銃保持禁止まで突っ走るぞと脅している。逆に民主党の一部は、長老が中道路線に固執することを恐れている。何しろバイデンが初当選したのはエルヴィスやブレジネフの時代である。人種や性別、宗教や文化観を修正しながら生き延びてきた。党を率いるよりは、後ろについてきた人物だ。そんな男がどうやって今の米国の病を糺せるのか？と怒りをあらわにする。

実はどちらも間違っている。右も左も、米国は過激派が変えると思っている。右ではゴールドウォーター、ティーパーティー、そしてトランプ、左では反ベトナム運動やバーニー・サンダースである。確かにこれらの勢力抜きでは、バイデン氏の出番はなかつただろう。

しかし連邦政府を確実に変えるには、上院での勝利が欠かせない。過激な候補者ではそれは不可能だ。これぞバイデン氏のパラドクスである。過去に人工中絶やバス通学問題で立場を変えたことで、左派からは疑念の眼で見られている。だがそういう人物でなければ、モンタナやジョージア州の上院選は勝てない。その方が、より多くの変化を実現できる。

2020 年はそういう年になる。2016 年のトランプ勝利は怒れる有権者の勝利と位置付けられた。ただし当時は失業が減少中で巨大テロもなかった。その点、今は 12.8 万人がコロナで死亡し、失業も増大中。専門家の意見に従う中道的美徳は、魅力的に映るのではないか。

バイデン氏の政策綱領は、実現しそうにないものの寄せ集めだ。それでも彼が勝った場合、2つの実現の可能性がある。ひとつは医療のパブリックオプションで、国民が保険を政府から買えるようになり、国民皆保険制へ一歩前進となる。もうひとつは温暖化ガスの削減である。バイデン氏は2050年までの排出ゼロ法制化を目指す。多国間主義への回帰は同盟国の賛意を得て、世界を安定に向かわせるかもしれない。これらのアジェンダの一部しか実現できなかったにしても、民主党左派の批判はないものねだりにみえよう。

大統領は突然、過激化することがある。ジョンソンはJFK死後に公民権法を実現させた。ブッシュ（子）大統領は9/11後に戦争に突入した。バイデン氏はこの逆説を読み違えてはならない。米国を新たな方向に導くベストな方法は、中道にしがみつ়くことなのだ。

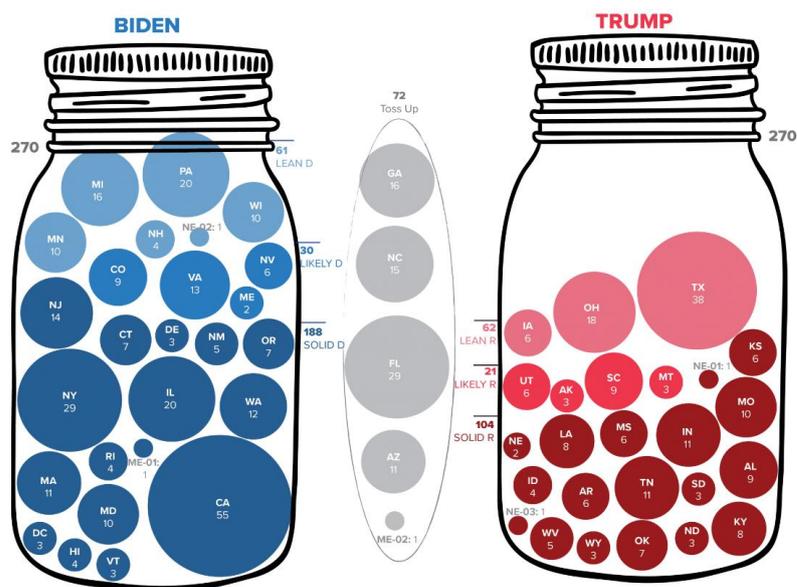
<From the Editor> 米大統領選挙の最新情勢

経済産業省が、石炭火力の在り方を見直す方針を打ち出しました。二酸化炭素の排出量が多い古い発電所を、2030年度までに9割程度、削減するとのこと。

確かに「脱・炭素」は世界的な流れですが、いかにも急な感じがする。そもそも島国で他国から電気を調達することができず、国内にエネルギー資源を持たないわが国としては、軽々しく欧州と同じ議論の土俵には乗れないはず。

それでも経済産業省が「年内をめどに具体策を」と言い出したのは、いよいよトランプ大統領が再選されないときのリスクを考え始めたからでありましょう。

7月に入ってからデータの風雲急を告げております。いつも本誌が当てにしている The Cook Political Report が、7月15日付のレポートでこんな図を掲げているのにぶっ飛びました（Amy Walter “More Ways of Looking at the Electoral College Picture”）。



なんとエレクトラル・カレッジ方式を現時点で予想すると、民主党がブルーステーツの選挙人を合計すると 279 に達し、過半数の 270 を超えてしまう。フロリダ州などの激戦州(72) を勝たなくても、バイデン候補が楽勝ということになっている。

逆に共和党はというと、ジョージア州が Toss up になっていて、あの巨大なテキサス州が Lean Republican になっているなど、過去の選挙戦を観てきた者には驚くべき様相を呈しています。そういえば Covid-19 は今や米国南部の諸州に蔓延していて、「全米で 1 日 6 万人」という途方もない数の新規感染者が出ている。「コロナ以前」とは情勢が一変していると言わざるを得ません。

しかし相手はあのトランプ大統領のこと、これで素直に「参った」と言うとは思われません。どんな捨て身の攻撃を加えてくるか、あるいはどんなオクトーバー・サプライズを仕掛けてくるのか。「スリーピー・ジョー」の眠気が吹っ飛ぶようなことが、この夏以降に控えているのではないかと思います。

8 月 1 日頃	バイデン氏が副大統領候補を公表
8 月 17-20 日	米民主党大会 (ミルウォーキー、WI)
8 月 24-27 日	米共和党大会 (ジャクソンビル、FL)
9 月初め?	G7 サミット? (ワシントン DC)
9 月 7 日	レイバーデー (この日を過ぎると選挙戦は終盤に)
9 月 29 日	第 1 回テレビ討論会 (インディアナ州サウスベンド)
10 月 7 日	副大統領候補討論会 (ユタ州ソルトレークシティ)
10 月 15 日	第 2 回テレビ討論会 (ミシガン州アナーバー)
10 月 22 日	第 3 回テレビ討論会 (テネシー州ナッシュビル)
11 月 3 日	米大統領・連邦議会・州知事等選挙投開票
12 月 14 日	選挙人による投票日
2021 年 1 月 20 日	新大統領の就任式

* 次号は中 2 週間のお休みをいただいて、2020 年 8 月 7 日 (金) にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com